

「実践事例集Vol.15」(2018年4月発行)で
紹介している事例を中心に抜粋しています。

(公益財団法人 ソニー教育財団)

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育 保育実践事例サイト
<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>

実践事例集

<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/practice/>

2017年度（平成29年度）
ソニー幼児教育支援プログラム

科学する心を育てる保育実践

～主体的な子供を育てるための教師の援助～



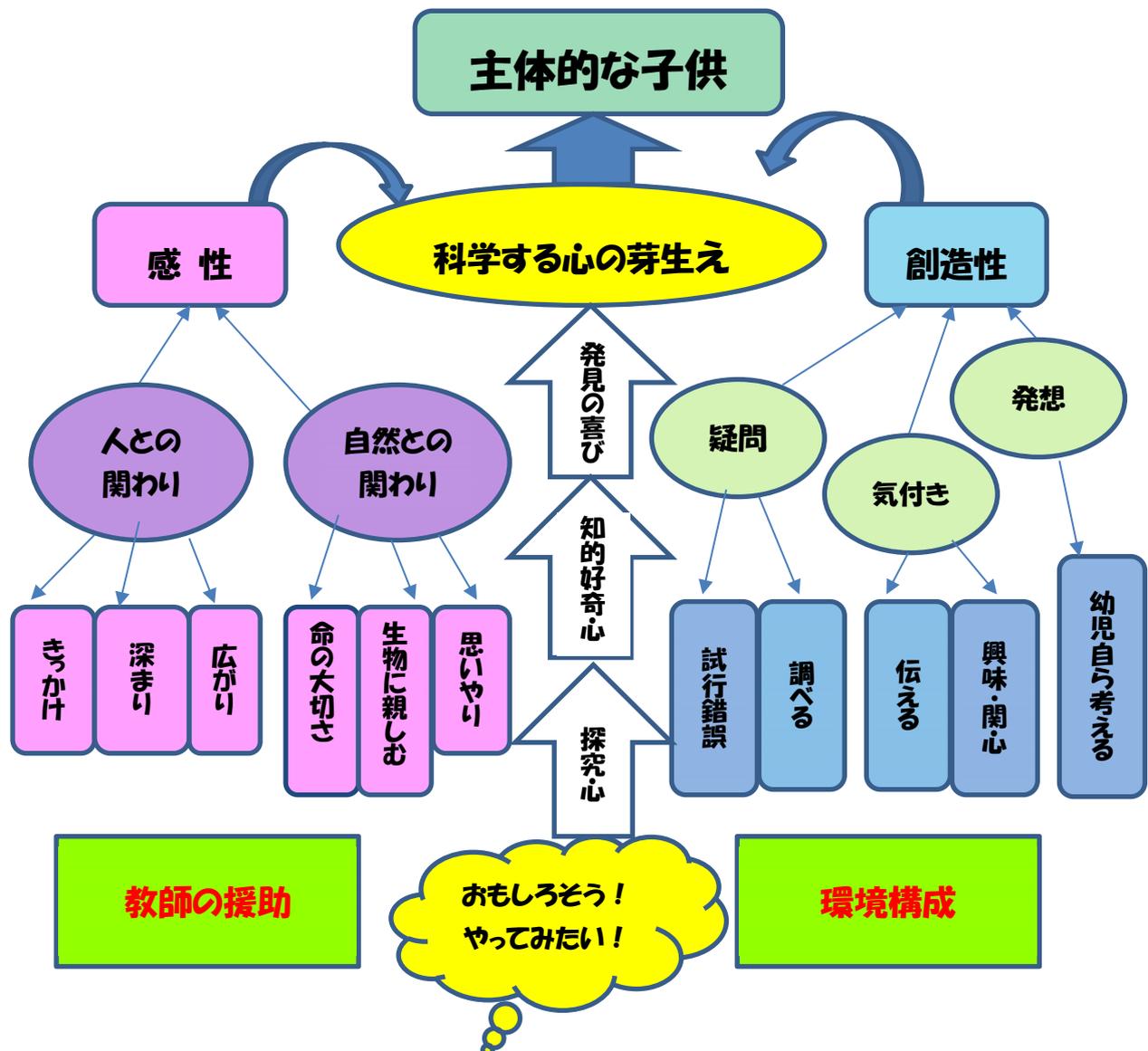
加古川市立両荘幼稚園

I 科学する心を育てるとは

科学する心は、幼児が自ら心を動かし何だろう、不思議だなと幼児が出合う様々な事象の中で育っていく。それは、偶発的なものであっても教師が意図的に計画したものであっても幼児が目を輝かし主体的に活動することで本物になっていくと考える。

幼児の主体的な活動とは「～してみたい」「こうしたらどうなるのだろう」「調べてみよう」「試してみよう」など願いを実現しようとするために試行錯誤をくり返しながら意欲的に環境に働きかける行動と捉える。

この時教師は、幼児が何を感じているか何に気付いているか何に疑問をもっているかなど幼児の心の内面に寄り添いながら適切な援助をし、科学する心の芽生えを育てていかなければならない。主体的に活動する幼児とは、ふだん生活する中で出合う様々な環境に興味や関心をもちながら意欲的に関わっていきこうとする幼児である。このように意欲的に環境に関わり主体的に遊び込める幼児を育てることが科学する心を育てるものと考え、教師の援助をサブテーマとし取り組むことにした。



II サブテーマの捉え方

～主体的な子供を育てるための教師の援助～

<主体的な幼児の姿とは>

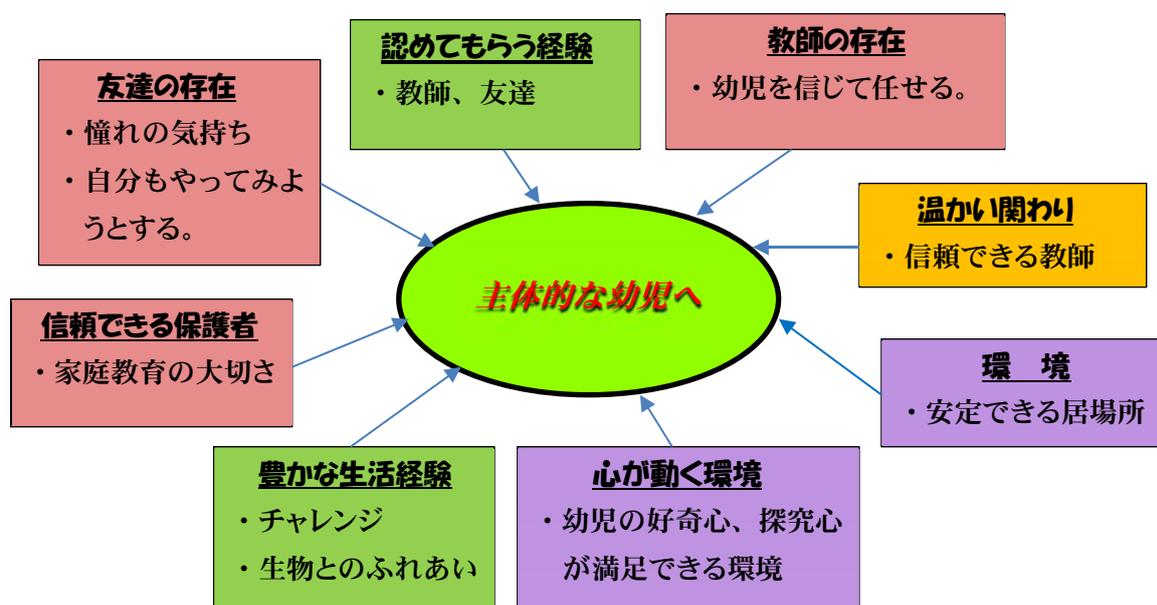
自ら環境に関わる中で、「～してみたい」「～できるようになりたい」と願いや期待を継続してもちながら遊んだり活動したりすることができる姿である。幼児は、願いを実現するために「こうしたらどうかな」「試してみよう」等と、感じたことや思ったことを自分の意思で遊びや行動に移そうとする。また、目に見えて積極的に活動している幼児に限らず、自分なりの思いをもって遊ぶ中で試行錯誤しながら問題を解決しようとしたり、友達と思いを伝え合い遊びを創っていきこうしたりする姿も主体的な幼児の姿であるとする。

幼児は、安心・安定できる環境のもと主体性を育むために必要な経験と教師の援助により、心情・意欲・態度などの力を育てていくことで主体的に活動できるようになると仮定し取り組んだ。

<教師の援助で大切なこととは>

- 幼児の思いや願いに寄り添い、幼児同士で考え合おうとしている姿を大切に受け止めながら、話し合いの時間を十分確保する。
- 幼児の興味や関心に基づき「こうしたい」「やってみたい」という思いをできる限り幼児の力で実現できるようにする。
- 幼児の気づきや発見を大切に受け止めることを意識しながら援助する。
- 身近にある環境を活かしながら、思わず遊びだしたくなるようなきっかけを作ったり、幼児間で思いや目的が共有できるよう橋渡ししたりする。

<主体的な幼児を育むために必要なこと>



『色水ジュース屋さんオープン!』(5月 5歳児)

5月に入り、園庭の花に気付き去年の経験を通して色水遊びを始めた。花や水の量、すり潰し加減を調節しながら様々な色を作ることを楽しむ中で、「これはぶどうジュース」「これはももジュース」など、色と味を考えながらジュースを作る姿が見られるようになった。これをきっかけにジュース屋さんを開きたいという意欲をもち、お客さんに来てもらう嬉しさ、美味しいジュースを作る難しさなどを感じながら遊びを発展させていく楽しさを感じる事が出来た。

エピソード① わたしたちジュースが作れるよ!

教師の意図と援助

幼児の学び

綺麗な色水を作って遊ぶ中で、W児が「ぶどうのジュースができた!」と教師に見せに来る。「美味しそうなジュースができたね」と幼児の姿を認めると、A児が「すごい! どうやって作ったん?」と問いかける。W児は実際に花を見せたりすり鉢で作ってみたりしながら「紫の花をいっぱい使ってる!」「何回もすり潰して、水もたくさん入れたよ!」等、一生懸命作り方を話す姿があった。その姿を通して、次の日から他児も“ジュースを作りたい!”と意欲をもって遊び出した。花によって出来あがりの色が違うことを意識しながら、自分の作りたいジュースの味によって花を選んで作り、様々な味のジュースが出来あがった。

出来あがったジュースを置けるように机を配置すると、友達の作った色にも興味をもち、それぞれの色の違いに注目して見る事ができた。

子供たちの発想を存分に受け止め、他児に伝えていけるように仲立ちする。

色水をジュースに見たてて遊ぶ楽しさ

花の色、水の量によって出来る色水の違い。

出来あがったジュースを置く机を用意するなど、場の整理ができるように配慮する。

エピソード② ジュース屋さんを開きたい!

どんどん新しいジュースが出来あがり、机の上に並べられてきた。それを見たA児の「ジュース屋さんみたい!」というひと言で“ジュース屋さんを開こう!”と張り切る。K児とY児が相談しながら机を出してシートを敷いたり、椅子を並べたりしてお客さんの席を作ると、「いらっしやいませ〜!」と元気な声が聞こえてきた。

教師がお客さんになるが、恥ずかしいのかどう接客をして良いのかわからないのか、なかなか動き出すことが出来なかった。そのことについてクラス全体で話しあう時間をもった。「お客さんが来たら席に案内する」や「何味のジュースにするか聞く」など、一人一人が考えたことをしっかりと発言し、お店のルールが少しずつ決まってきた。また、看板やメニューが必要であることも考え、作ることを決めた。

友達の作った物に目を向け、色の違いや濃い・薄いなど同じ色でも違いがあることを知る。

子供たちの思いをくみ取りながら、遊びを広げていけるように、机や椅子、おぼん等を用意し、環境を整える。

お店屋さんをする為には何が必要かを考え、周りに伝える。



エピソード③ ジュースが腐っちゃった…

休み明けに遊びを始めたW児が「ジュースが変なおいする!!」と友達や教師に伝えに来た。みんなで匂ってみると「くさっ!」「変な匂いや〜」とジュースが臭くなっていることに驚きやおもしろさを感じていた。その中で、A児は「せっかく作ったジュースが腐っても

幼児の気持ちに共感し、周りの幼児に知らせる姿を見守る。

た…」と少し落ち込んだ様子があった。話しあう時間をもつと「新しいジュースを作ればいい」という意見が出たがA児が納得できず、上手く話し合いがまとまらなかった。その為、教師が「臭くならないようにできないかな～」とつぶやいた。それを聞き、“腐らないジュースを作るには”と一人一人がよく考え、たくさんの意見が出た。その中で、すり潰した花がらを入れたままにしているからそれが腐ってしまうのではないかとみんなが納得できる意見が出て、“やってみよう！”と決定することができた。

次の日から、ざるを使ったり、手で花がらを取り除いたり、思い思いのやり方で花がらが入らないように気をつけて作っていた。すると数日たっても臭くならないことがわかり、「私たちが考えた通りだ！」と喜ぶ姿が見られた。

子供の発見や考えを受け止め、共感しながら教師も共に考える。それぞれの思いを伝え合う場を作る。

互いの思いを伝え合い、新しい考えを出し合う楽しさ

子供たちだけでは解決が難しい時は、ヒントを出し、できるだけ子供たちが考え、決定していけるように配慮する。



エピソード⑤ 色水ジュース屋さんオープン！！

繰り返し遊ぶ中で、お客さんに来てもらう為には

- ①美味しいジュースを作る
- ②いろいろな種類のジュースがある方がいい
- ③どんな味があるかお知らせする

など、自分たちで決めたルールが出来上がった。また、「〇〇ちゃんぶどうのジュースやって！」「もうすぐサイダーのジュースできるよ！」等、互いに声をかけ合いながら、注文を聞く人、ジュースを運ぶ人、ジュースを作る人と自然に分担しながらお店屋さんを進めていくことができていた。

自分たちで決めたルールをしっかり守って遊ぶ姿を大いに認める。

それぞれの役割を知り、友達と思いを伝え合いながら遊びを進めていく楽しさ

共に遊びながら楽しさに共感し、互いに声をかけ合う姿を見守る。



【考察】

- ・繰り返し色水遊びをする中で、“ジュース屋さんを開きたい！”という新たな発想が生まれ、それを実現する為に友達と考え合い、試行錯誤しながら創りあげていくことの喜びが自信に繋がっていった。この経験を通して、新しい遊びを広げていくことの楽しさを知った。これからの遊びの中でも様々な発想を広げながら遊ぶことを期待する。
- ・いろいろな話し合いを通して友達の思いに気付いたり、自分とは違う意見があることを知ったりしながら、みんなの意見を一つにしていく難しさを感じた。また、みんなで思いを共有して作りあげていく楽しさも感じる事ができた。これからの遊び、生活の中でも、自分とは違う意見があることを受け入れながら考えていくことができるのではないかと考える。

『光る泥だんごを作りたい!』(5月 5歳児)

5月中旬になり、砂場遊びで型抜きをしたりケーキを作ったりする姿が多く見られるようになった。その姿から、クラスに『どろだんご』の絵本を置いておくようにした。絵本に気付いたA児が興味をもち「光る泥だんごを作ってみよう!」と作り始めた。その姿がクラス全体に広がり、全員が「光る泥だんごを作りたい」という思いをもち始めた。上手く出来なかった時の悔しさや一つの物を作り上げる難しさを感じる中で、友達と考えを出し合いながら試行錯誤する楽しさやできた時の喜びを味わいながら遊ぶことができた。

エピソード① 泥だんごを作ってみよう!

教師の意図と援助

幼児の学び

絵本を見てA児が興味をもち泥だんご作りを始める。その姿に気付いた他児も遊びに加わり、自分たちの知っていること、絵本に書いていたことを思い出しながら作り始めた。バケツに砂場の土を入れ、そこに少しずつ水を加えながら丸い形にしていった。しかし、すぐに割れてしまったり、でこぼこして丸くならなかったりと思うようにいかなかった。

なぜ上手くできなかったのかをクラスで話し合うと、「水を入れすぎたのかな?」「サラサラの土のほうがいいのか?」「優しく握らないとだめなのかな?」等、いろいろな意見が出てきた。それらの意見を取り入れ、

① 水を少しずつ入れる。 ② ふるいにかけてさら砂を使う。という二つの作り方で試してみよう!と決めた。

子供たちの興味に合わせて、絵本を置くなど、環境を設定する。

興味をもち、自分なりに考えて遊ぶ楽しさ。

なぜ上手く出来なかったのかを考える

クラス全体で遊びが上手いかなかった原因を考え合う場を作る。



エピソード② 少しの水と、優しくぎゅぎゅっ!

次の日から、みんなで決めた作り方で試してみる。より細かいさら砂が作れるように網目の細かいふるいも用意した。「これで作る方がさらさら~」「違う土みたい!」と感触の違いを感じる事ができた。

バケツにふるい・スコップ・水を入れるお椀など、自分たちで考えながら用具を用意し、黙々と作り始める。しばらくすると「あ~割れちゃった...」「全然固まらない!」という声が何度も聞こえてきた。初めはそれぞれに作っていた子供たちだが、「ひびができたら、手に水をつけてちょんちょんしたらなくなるよ!」「さら砂をちょっとずつかけたらいいよ!」「優しくぎゅぎゅっ!って握るねん」等、お互いに声をかけ合いながら作るようになった。また、「さら砂かけてあげる!」「〇〇ちゃんお願い!」と協力しながら作り始める姿が見られるようになった。

自分のイメージする泥だんごを作る楽しさと難しさ

泥だんご作りに必要な物を自分で考える。

自分のイメージする物を作る楽しさと難しさ

幼児なりの考えをすぐに試せる用具、材料を用意する。

子供たちの声を拾いながら、「〇〇ちゃんが困っているね」等のつぶやきをし、友達の姿に気付けるように配慮する。

エピソード③ 砂場の土と違う！！

園の畑に行く日の朝に「畑の土と砂場の土って一緒かな？」と子供たちに問いかけた。去年から野菜やさつま芋植えて畑の土を触る機会が多かった子供たちは「砂場の土とは違う！」と感触の違いを知っていた。するとA児が「畑の土で泥だんご作れるかな？」と言った。それを聞いて他児も興味をもち、畑の土をもって帰ってくることに決まった。

畑の土に水を入れると砂場の土の感触とは大違いで、「うわ～ねちゃねちゃやー！」「気持ちいい～」と思ひ思ひの言葉が聞こえてきた。場所によって土の違いがあることを知り、園庭の土も試してみることにした。



幼児の疑問に思ったことをすぐに試せる環境作りをする。

畑の土と砂場の砂の感触の違い

幼児の気づきや発見を大いに認め、嬉しさや楽しさに寄り添う。



子供たちの発想を引き出せるように、問いかけ、考える時間を作る。



エピソード⑤ 光る泥だんごの展示会！

砂場・畑・園庭の土を使って泥だんごを作った。

- ・砂場の土は細かい石がたくさんあり、さらさらすぎてすぐに割れてしまう。
- ・畑の土は良く固まって良かったが、固まりすぎて硬くなってしまった。また、綺麗な丸にすることが難しく、でこぼこになってしまう。
- ・園庭の土は柔らかく、水を入れるとよく固まり、少しずつ綺麗な丸にできた。

実際に作ってみる中で、「この土硬い！」「この土は良く固まる！」など、それぞれの土の違いを知り、どれが“光る泥だんご”を作るのに適しているかを考え、【園庭の土】が一番作りやすいことを発見した。園庭の土を使い、何日もかけて少しずつ作り、それぞれにお気に入りの光る泥だんごを作りあげることができた。

子供たちの気づきや考えを大いに認め、自信に繋げる。

「泥だんごが光ってきた！」などより期待感がもてるように励ましていく。

何度も失敗を繰り返しながら、作りあげた達成感や満足感を感じる楽しさ

固まり方が違うこと

子供たちの達成感、充実感を十分に認め、教師も感動を共有する。

【考察】

- ・“光る泥だんごを作りたい”という思いをクラスで共有し、失敗しても諦めずに試行錯誤を繰り返してきた。何度も考え、試すことで作り方に工夫が生まれ、場所によって土が違うことにも気付くことでたくさんの発見や学びがあった。泥だんご作りと言う経験を通して、自分たちで考え、出来あがっていく楽しさや嬉しさを感じ、できあがった達成感や満足感が自信に繋がったのではないかと考える。これらの経験を通して、失敗しても諦めずに挑戦していく力を発揮してほしいと期待する。
- ・泥だんご作りを通して土の感触や固まり方の違いなど、自然の不思議にたくさん触れることができた。様々な場所の土を使って泥だんごを作る中で、さらさらの土や固い土、日陰では土が冷たくなること、石がたくさんある土を裸足で歩くと痛いことなど、体験によって不思議さを感じ、なんでだろうと考える心が育ったのではないかと考える。これからもたくさんの自然に不思議さを感じながら遊ぶ楽しさを味わってほしいと願う。

実践事例2 生物との関わり

『テントウムシの赤ちゃん大きくな〜れ!』(4月~5月 5歳児)

園周辺のれんげ畑を散策に行った時、テントウムシとテントウムシの幼虫を発見した。初めはつかまえることが嬉しいという様子の子供たちだったが、観察することでいろいろな気付きや発見があると思い、幼稚園で育てることに決めた。不思議や驚きを感じた子供たちは、様々なことを発見し、友達と相談したり思いを共有し合ったりする中で、テントウムシに思いを寄せ、共に成長を喜び合うことができた。

教師の意図と援助

幼児の学び

エピソード① 発見! 何の赤ちゃんかな?

れんげ畑でたくさんテントウムシを見つけた。その中でテントウムシと違う形の小さい黒っぽい虫を発見し、「これ何かな?」と疑問をもつ。K児、Y児は知っていた様子で「テントウムシの赤ちゃんやんな?」と思い共有し合う。

園で絵本や図鑑を使って調べ始めると「これかな?」「色が違うかな〜?」「ここにも載ってるで!」「これと一緒にや!」と友達と伝え合いながら、テントウムシの幼虫であることがわかった。

また、調べる中でカラスノエンドウの葉っぱが好きでアブラムシを食べることを知った。

子供たちが調べられるように、絵本や図鑑を見える位置に提示しておく。

不思議に感じたことを自分で調べ、発見する嬉しさ

子供の発見や考えを受け止め、共感しながら教師も共に考える。それぞれの思いを伝え合う場を作る。



エピソード② 今日からみんながお母さん!

幼虫であることを発見した子供たちは、自分たちで育てたいという思いをもつ。「育てるならみんながお母さんになってあげないといけないね」という教師の言葉を聞いて、「私、お母さんになる!」と張り切っていた。

まずは幼虫の部屋作りから…「土入れた方が良くないかな?」「葉っぱのお布団もいるんじゃない?」と友達と相談しながら土や葉っぱを入れる。その後アブラムシを探しに行くがなかなか見つからない。するとA児がある葉っぱにテントウムシがいるのを発見!それが本で調べたカラスノエンドウであることに気付き、「テントウムシの好きな葉っぱや!」「ここにいる小さい虫がアブラムシや!」と他児に伝え、クラス全体で共有することができた。アブラムシが見つかり、「ご飯だよ」「いっぱい食べてね」等、テントウムシの幼虫に話しかける姿があった。

“お母さん”という子供たちの身近な人物に例えながら、大切に育てる気持ちを感じられるように言葉がけをする。

友達の思いや考えを知り、互いの思いを組み合わせながら一つの環境を作り出す楽しさ

生き物のコーナーを作り、自分たちのペースで毎日ゆっくり観察ができるように環境を設定する。



エピソード③ 赤ちゃんが動かない!!

ある日登園したK児が飼育ケースを観察していると「動かない赤ちゃんがいる!」と発見し、他児に知らせる。「なんでかな?」「寝てるのかな?」「元気ないのかな?」という声が聞かれた。それから、餌を入れる際には、「そーっと入れて!」「動かしたらあかんで!」等、動かなくなった幼虫を動かさないようにと慎重に世話をする姿が見られた。

不思議に思い、生き物に思いを寄せる優しさ。

幼児の気持ちに共感し、周りの幼児に知らせる姿を見守る。

エピソード④ テントウムシが増えてる!!

休み明けにテントウムシが増えていることを発見し、不思議に思ったY児とK児が調べ始める。赤ちゃんが動かなくなったのは“さなぎ”になったからであること、さなぎになってテントウムシが生まれてくることがわかり、教師や友達に一生懸命伝える。不思議に思ったことを発見できてとても嬉しそうな表情であった。その後も一生懸命調べたり、観察したりを続け、生まれてすぐは黄色のテントウムシであることやだんだん模様が出てくることなどもわかった。



テントウムシの成長過程がわかるような図鑑を置いておく。



テントウムシ誕生の嬉しさ。

生き物の成長の過程や変化を知った喜び。

エピソード⑤ テントウムシさんお空飛びたいかな?

テントウムシがたくさん生まれ、飼育ケースがいっぱいになってきた。触ってみようと蓋を開けた時にすぐ飛ぼうとするテントウムシを見て「飛びたいのかな…?」という幼児の声を聞き、これからずっと飼うのか逃がしてあげるのかをクラスで話し合う時間をもった。

“せっかくなつかまえてきたのに逃がしたくない”“お父さん、お母さんに会いたいと思うから逃がしてあげたい”“広いお空飛びたいと思う”など様々な意見が出た。はじめは自分の意見ばかり主張する幼児が多く、なかなか決められなかったが、少しずつ相手の意見を聞く姿勢が見られるようになった。“逃がしたくない!”と言っていた幼児も友達の意見を聞き、“逃がしたくないけど、テントウムシさんがお空飛びたいと思うから逃がしてあげる”と生き物の気持ちになって考えることができた。みんなで「元気でね〜!」「いってらっしゃ〜い」と声をかけ、逃がした。

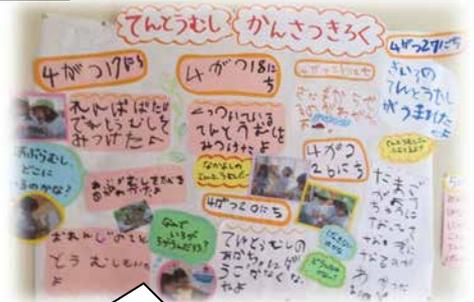
それぞれの意見に共感しながらあまり介入せず、子供たちだけで決められるように見守る。

生き物の気持ちになって考えることで、身近に感じたり大切に思ったりする姿に寄り添う。

しっかりと自分の意見を言う中で、友達の思いにも気付き、それを受け入れながら自分の意見に反映させる。折り合い。

【考察】

- ・テントウムシを育てる中で「なんでだろう?」「どうしてかな?」等、様々な不思議が生まれ、それを自分たちの力で調べ発見することができた。知ることの嬉しさを感じたことで、今後出会う様々な事象に対して、探索・探究していこうとする意欲に繋がっていくのではないかと考える。
- ・テントウムシという命ある物の成長に触れることで、人とは違うが命あることに気付き、大切にしようとする気持ちが芽生え、生命を尊重する心に繋がっていくのではないかと考える。



気付いたことをいつでも記録できるように準備しておく。表にして提示することで、成長過程の振り返りができる。

「カブトムシ大変身」(6月 4歳児)

6月ごろ、前年度から部屋で飼育していたカブトムシのケースに興味をもち始めた子供たち。初めはカブトムシの飼育ケースを置いていても関心を示さなかったが、入園してから様々な生き物を飼育し触れ合う中で少しずつ関心をもち始め世話をするようになり、カブトムシが日々変化を遂げていく様子に気づくようになった。毎日観察しながら喜び、カブトムシの成長を共に喜び、自分たちで図鑑を見ながら調べることを通して友達と一緒に驚きや感動を共有する事が出来た。

エピソード① お世話頑張るぞ

教師の意図と援助

幼児の学び

興味をもった時に見られる位置に絵本や図鑑を置いておく。

カブトムシに思いを寄せ、想像しながら幼児なりの思いを言葉で伝えあう楽しさ

カブトムシになることを楽しみにし、期待をもって世話をする喜び

保育室にあった霧吹きを見つけ、「何に使うのかな」と教師に尋ねるB児。「カブトムシのお世話に使うのよ」と伝えると「やりたい!」と意欲を見せる。B児が霧吹きで水をかけている姿を見て他児も自分もやりたいと興味をもった。幼虫が土から出てきたところを見つけ「これ、なに?」と疑問をもつ幼児もいた。「カブトムシかな」「さなぎになるのかな」「変身するのかな」と世話をしながら友達同士で思いを伝えあってカブトムシの絵本を見ていた。それからA児とB児は毎日登園すると一番にカブトムシを見るようになり、霧吹きをして世話をすることや幼虫を観察することを楽しんでた。



エピソード② さなぎになってる!

カブトムシが大好きなA児。登園してすぐに幼虫が白くなっていることに気づき、「ねえ!白くなってる!」と教師や友達に知らせる。他児も興味をもち見ようとする。教師は「A君よく気が付いたね。みんな教えてもらえてよかったね。」と周りの幼児に声をかけた。虫に詳しいB児が「これはさなぎになってるんだよ。だから触ったらだめ!」と周りの幼児に教えている。「なんで触ったらだめなの?」と聞くと「触ったら怪我して死ぬから!」と答えた。他児もそれを聞き、さなぎは触ってはいけないと友達同士で教え合っていた。その後A児とB児は図鑑を出してきて写真を見ながら「これとおんなじや!」「うん、今これやな!」と話をしながら観察していた。

幼虫から変化したことへの気づき

幼児の気づきを認め、他児に思いを伝えられるように言葉かけをする。

命の大切さを感じ、元気に大きくなってほしいという思いやり

本と比べながら観察する楽しさ



エピソード③ カブトムシが生まれた！

昨日からカブトムシが気に入り朝早く登園していたA児はある朝カブトムシが生まれているのを発見した。土から出ているのを見つけ、友達の子に「生まれてる！！」と声をかけ、A児とB児は大喜び。クラスの中には触ることを嫌がり怖がる子もいたがB児が「オスはちっちゃい角を持ったら（手が）痛くないで」と教えてくれると怖がっていた子も「触ってみたい！」「持ってみようかな…」と積極的に触ろうとしていた。「すごい！怖かったのに触れるようになったんだ！」と教師が認めると「うん！ちっちゃい角持ってたー！」と笑顔で見せてくれた。

カブトムシの家づくりでは「カブトムシのおうちって何があるのかな？」と尋ねるとA児はさなぎを見ていた図鑑をもってきて「これに書いてあった！」と本を見ながら土や木、エサのゼリーを入れたりして過ごしやすいおうちを考えていた。

友達同士で生まれた喜びを共有すること

チャレンジできたことを共に喜び、満足感や達成感を感じられるようにする。

幼児が考えられるきっかけを作り、幼児なりの思いに寄り添いながら一緒に考える。

自ら調べたり観察したりする楽しさ



エピソード④ カブトムシって飛ぶの！？

ケースの中に部屋を作ったりエサをやったりしながらカブトムシとふれ合うことを楽しんでいる。ふたを開けると、1匹のカブトムシが飛び出て壁にとまった。子供たちは「びっくりした！」「カブトムシって飛ぶんや！」と驚き、新たな発見を喜んでた。その後も「あ！羽出てきた！」「飛びそう！」と観察を楽しんでいた。「飛べカブトムシ」の絵本を見ながら「こんな飛び方だった？」「うん羽がバタバタしてた！」「びっくりしたねえ」と思いを共有していた。

新たなことを発見した喜び

驚きに共感し、発見したことを共に喜ぶ

【考察】

- ・カブトムシの世話を通して、日々変化していくことに驚きを感じ心を揺さぶられた子供たち。その変化する過程で子供たちの疑問に寄り添うように図鑑を置いたことで子供たちがますます自分たちの力で調べようとする意欲をもつことにつながったのではないかと考える。
- ・友達と観察したり一緒に世話をしたりすることで「元気に大人のカブトムシになってほしい。大人になったカブトムシが見てみたい」という強い思いがクラスに広がった。その過程で喜びや驚き、発見を共有していくことで友達関係も深まっていったのではないかと考える。

実践事例3 風の不思議

『飛べ、風船おばけ!』(7月 4歳児)

おばけの絵本を読んでおばけに興味をもった子供たちと一緒にレジ袋でおばけを作った。それぞれが自分の思い描く顔を描き、「おばけの顔ってどんな顔かな？」と楽しんで制作をした。完成したものを「風船おばけ」と呼んで、自分の顔に当てたり投げたりして遊ぶ中で子供たちなりに考えて様々な遊びを作り出すことができた。

エピソード① おばけをキャッチ!

教師の意図と援助

幼児の学び

それぞれ自分のおばけが完成し、友達や教師に見せて楽しんでいた。始めは自分の顔に当てておばけになって遊んでいた。R児が風船おばけを投げ、キャッチして遊び始めたので「Rちゃん、それおもしろそうだね!」と声をかけると他児も興味を持ち真似て遊び始めた。「キャッチするのが楽しい!」「ふわってなる!」と素材ならではの感覚を楽しんでいた。

Y児はうまく投げるができなかったので、「先生が上から投げて!」と訴えてきた。そこで一緒にチャレンジしながらも教師が高く手を挙げて落とすとよく飛び、「すごーい! あっちまで飛んでいった!」と子供たちは大喜び。他児も自分で投げているのと教師が上から落としているので“何か違うぞ”と感じ取り、「私のもして!」と意欲的に遊ぶことができた。

自分で作り上げる楽しさ

幼児の発見を他児が気付けるような声かけをする。

幼児と共に発見を喜び、遊びが広がるよう援助する。

投げ方や投げる高さによって違いがあることの気づき



エピソード② おばけが飛ばされた~!

風船おばけを飛ばして遊んでいると扇風機の風が当たり「風が吹いてくる!」という声が聞こえたことで、より扇風機に近づけて投げるようにしてみた。子供たちは強い風で勢いよく飛んでいく風船おばけを追いかけ、キャッチしている。「(落ちてくるのが)早いー!」「届かなかった!」と何度もチャレンジしようとする姿が見られた。風が強かったり高いところから投げたりするとよく飛ぶなど遊びの中から不思議に思ったり発見したりすることができた。

I児が「お外で飛ばしたい」と声をかけてきた。「それは楽しそうだね!でも飛んで行ってしまわないかな?」と問いかけると「そっか、どうしよう」と考えているようだった。

風による飛び方の違い

キャッチできなくてもあきらめず楽しみながらチャレンジしようとする気持ち

幼児の思いに共感し、共に考える。



エピソード③ 飛べ飛べ風船おぼけ

外で遊びたいという子供たちの声を受け、ひもをつけ、凧のようにすることにした。子供たちは外に出るとひもを持って思い切り走り出した。しかし止まっても風船おぼけがふわふわと動いていることを発見した子供もいた。「動いてないのにふわふわって動いた!」「お外だから風が吹いてるもん」とそれぞれの思いを伝え合っていた。

R児が「Yちゃんのちょっと貸して」と言って2つ持って走り出した。それを見て他児もそれぞれ貸し合いながらたくさんの風船おぼけをもって引っ張るような感覚を楽しんでいた。全員分が集まり、交代で遊んでいるとI児が「重たい!」と言いながら走り出した。風の抵抗で風船おぼけの形が変わったり走る勢いで高さが変わったりすることを体験できた。

幼児なりに遊んでいる姿を見守り、幼児の発見や喜びに共感する。

友達の発見から考えたり気持ちを言い合ったりする面白さ

順番を守るなど気持ちよく遊べるように声をかけながら全員が体験できるようにする。

風の強さで風船の高さが変わるおもしろさ



【考察】

- ・風船おぼけで遊ぶことを通して風という自然の中で遊ぶ楽しさを存分に味わった。風の強さや勢いを体感しながら風船の飛ぶ高さに違いがあることを発見していた。
- ・幼児が感じたことや楽しいと思ったことを共有し、友達同士で風船の交換をし合いながら試していた。友達と共に遊ぶ楽しさを存分に味わうことができたように感じた。
- ・風船という一つの素材が風の抵抗を受けることで様々な形に変わったり高さが変わったり動きが変わったりする「おぼけ風船」をただ作るだけに終わらず、キャッチするという遊びの中で教師が共に楽しむことで子供たちの意欲はどんどん高まっていった。また、外で遊びたいという子供の思いに寄り添うことでさらなる発見を生んだ。教師は常に子供と楽しみ、子供の感じる不思議さや発見の喜びに共感したことがたくさんの学びを得ることにつながったと考える。